

倭京の“守り”

— 古代都市 飛鳥の防衛システム構想 —

相原 嘉之

I. はじめに

我が国の都城には、中国都城のような羅城は存在しない。唯一、平城京・平安京の南辺にのみ、羅城が推定されているが、都城全体を囲むような城壁はない。大陸の都城と違って、我が国は海に囲まれた島国であり、直接他国からの侵略がなされにくいことによる。しかし、古代において、他国からの侵略の危機は確かに存在した。白村江の大敗を受け、極めて軍事的な危機感を持ったのである。これに対応するかのように、北部九州並びに瀬戸内沿いに山城が次々と築かれていく。一方、内政の危機としては壬申の乱があげられよう。天武天皇が「政の要は軍事なり」と記したのはまさしく、これらの経験を踏まえてのことであった。

このような国際・国内情勢にあった7世紀に、首都を防衛するシステムは当然あったはずである。飛鳥周辺では近年興味深い発掘調査成果が得られている。高取町の森カシ谷遺跡の砦跡や飛鳥東方丘陵上の掘立柱塀である。これらは飛鳥の防衛という観点でみると、極めて興味深い事例である。また、これまでから指摘されていた丘陵上遺構のいくつかについては、やはり同じ観点からの指摘ができる。さらに「ヒブリ山」地名や寺院、そして河川など総合的に検討した場合、飛鳥地域の防衛システム構想の一端を担っていた可能性が高い。本稿では都城の防衛体制について、特に、7世紀の飛鳥地域の防衛体制について、文献史料や遺跡からの検討を試みたい。

飛鳥地域における防御施設について、最初に注目したのは岸俊男氏であった。岸氏は「ヒブリ山(火振山)」地名が飛鳥を取り囲むように存在し、また交通の要所に分布することから、烽・戍などの倭京の防御施設の可能性を指摘した(岸1970)。また、菅谷文則氏は佐田遺跡群の調査を通じて、佐田遺跡群が飛鳥西南の交通の要所に位置することから防御施設という評価を下し、飛鳥の外域的施設を想定している(檀考研1984)。都城研究に防衛という視点を積極的にとり入れたのは阿部義平氏である。阿部氏は太宰府に巨大な羅城を復元、これを基に、斉明紀にある両槻宮を飛鳥東方の多武峰に想定、倭京の山城とした。さらに甘檀丘の蘇我氏の邸宅や各種施設、そして稜線を伝う山界形の城郭都市と説く(阿部1991)。関川尚功氏は飛鳥・藤原京周辺の丘陵性遺構の検討から、これらが交通の要所の丘陵上に位置することと、倉庫を有し、瓦・硯が出土するなど、一般集落との差異を明確にし、砦や見張り台などの監視施設と推定した(関川1993)。また、千田剛道氏は関川氏らが指摘した丘陵上の遺跡にくわえて、蘇我氏の邸宅の構造が防御施設としての意味が高く、これが飛鳥を守る一部になるとする。また、寺院や地形ともあわせて、飛鳥の防衛は自然地形を利用し、烽などを周辺に配置し、厳重な防御施設である寺院や蘇我氏の邸宅によって守られたものとする(千田1997)。

いずれも飛鳥を守る施設を、多くの視点で検討してきたものである。しかし、飛鳥には都を囲む羅城はなく防御性は乏しいと言わざるを得ない。その中で、近年発見された尾根上の掘立柱塀や烽と推定される遺跡は、極めて注目される成果である。

II. 律令国家の軍事組織

我が国における律令国家の軍事的組織には、都城の軍事組織である「衛府」と、諸国の軍事組織である「軍団」がある。ここでは両者の組織について、律令の規定をもとに整理することにする（鎌田1988・早川1988）。また、後の遺跡の検討にもかかわる、これらの情報通信システムである「烽」についても整理をしおく。

都城の軍事組織

「衛府」は都城において、天皇及び宮城の警備、京内の警備を担当していた。大宝令・養老令によると衛門府・左右衛士府・左右兵衛府の五衛府制であり、各種の舎人があった。衛門府には門部に200人、衛士400人が配属され、左右衛士府には衛士がそれぞれ600人、左右兵衛府には兵衛がそれぞれ400人でもって、警備を担当していた。一方、舎人は中務省に所属する内舎人90人、左右大舎人寮に所属する大舎人がそれぞれ800人、中宮職に所属する中宮舎人400人、春宮坊に所属する東宮舎人600人が、天皇・皇后・皇太子をそれぞれ警備した。また、左右馬寮・左右兵庫・内兵庫も都城の軍事組織に含まれる。

諸国の軍事組織

「軍団」は畿内を含む諸国の国司の管轄のもと設置された地方の軍事組織である。一般の農民から徴発された兵士が、50人で隊を組み、1000人で軍団を構成する。この兵士を統率・指揮する大毅・少毅も郡司と同じ在地の首長層から任命され、武器と食料は自ら調達しなければならなかった。なお、衛門府や衛士府に配属される衛士は、軍団の兵士から採られる令の規定である。

烽の通信システム

「烽」は高速情報通信システムとして、少なくとも弥生時代から存在した。しかし、古代の烽制としては、663年の白村江の敗戦を受けて、その翌年に防人と烽を置いたことに始まる。古代烽の制度は『軍防令』に詳しく記されており、烽は基本的には40里離れた位置に設置する。そして、昼は烟火、夜は火をあげて情報伝達を行い、次の烽が対応しない場合には脚力を送って連絡する。また、賊の越境侵入を知らせるには、賊の規模等に応じて烽の連絡方法をランク分けしている。烽は烽長2人が3つ以下の烽を管轄し、国司が地元有力者から任命する。また、公の事以外では担当の烽から離れてはいけない規定になっている。

烽は互いに45m離して火炬を設置することになっていた。火炬の構造は、乾燥させた葦を芯にして、葦の上に乾草を用いて節を縛り、その節の周囲に肥えた松明を差し挟んだものであった。その火炬十具を建物の下に積んで濡れないように貯えなければならなかった。また、烟を放つ時は、よもぎ・藁・生柴などを混合して薪とし、烟を放った（佐藤1997）。

日中の律令軍事組織の比較

我が国の軍事組織は唐制を模範として組織されている。それは唐制の軍事組織である「十二衛」「六率府」と、諸国の軍事組織である「折衝府」である。しかし、そこには相違点もみることができる。まず、日本の「軍団」は唐の折衝府を模範としたものであるが、折衝府は長安・洛陽の近辺に集中して配備されているのに対して、軍団は全国均一に配備されている点である。次に、唐の折衝府は中央の十二衛の直属の管轄下にあるのに対して、日本の軍団は平時にあっては、国司の管轄下にあること。折衝府の指揮官は中央からの派遣であるのに対して、日本の軍団の指揮官は現地の首長層から任命されていることである。このうち、3点目は大化前代からの系譜を残しているものと考えられるが、1・2点目は唐と日本の軍事面において、重要な

点を含んでいる。つまり唐では天子防衛・首都防衛のための軍事体制であるのに、我が国の軍事体制は首都防衛だけでなく、外からの侵略に対する国防体制であったことを明確に現わしている。

Ⅲ. 記録にみる飛鳥の軍事防衛時期

前項では律令制度における軍事システムを概観してきたが、ここでは史料にみられる飛鳥時代の軍事に関する史料から、都における国内・国際情勢（森2002）や当時の軍事システム、その国防の必要時期について検討してみたい。

推古朝における国際情勢

この時期には新羅討伐があげられる。推古8年には「新羅征討を決議」、推古10年には「久米皇子筑紫へ」とある。しかし、新羅へ直接軍隊を派遣し、武力によって任那を奪還するものではなく、派遣は筑紫に留まり、新羅を威嚇して任那を復興するものであった。よって、厳密な意味でどこまで、半島にむけて武力行使を実施しようとしていたのかは疑問で、我が国においても直接的な危機感は薄かったものと思われる。

皇極朝における軍事施設

蘇我蝦夷・入鹿の邸宅は皇極3年11月条に「蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を甘櫛岡に雙べ起つ。大臣の家を呼びて、上の宮門と曰ふ。入鹿の家をば、谷の宮門と曰ふ。男女を呼びて王子と曰ふ。家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を作る。門毎に、水盛るる舟一つ、木鉤数十を置きて、火の災に備ふ。恆に力人をして兵を持ちて家を守らしむ。大丹穂山に、梓削寺を造らしむ。更家を畝傍山の東に起つ。池を穿りて城とせり。庫を起てて箭を儲む。」とある。この記事の内容から甘櫛丘の邸宅は柵に囲まれ、武器庫や用水桶を備え、厳重な警備がなされていたことがわかる。さらに畝傍山の麓の家については、池を掘り、武器庫を併設している。これらのことから蘇我氏の邸宅は柵と濠で守り、兵士によって警護されるというものであった。また、皇極4年6月戊申条の乙巳の変では、飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿を倒した後にすぐ、「中大兄、即ち法興寺に入りて、城として備ふ」とあるように、飛鳥寺をまず抑えにはいつている。寺が軍事拠点となる好例である。

孝徳朝における軍事体制

大化元年8月庚子条に「閑曠なる所に、兵庫を起造りて、國郡の刀・甲・弓・矢を収め聚め、邊國の近く蝦夷と境接る處には、盡に其の兵を数え集めて、猶本主に假け授ふべし」とあり、各国に、特に蝦夷と接する国については武器の管理を徹底している。このことから蝦夷地域、つまり北方開発に向けての準備を進めており、次の斉明朝への布石となっている。翌9月丙寅条にも「使者を諸國に遣して、兵を治む。或本に云はく、六月より九月に至るまでに、使者を四方の國に使して、種種の兵器を集めしむといふ」とあり、同様の記事をのせる。大化2年正月甲子条の改新の詔には「初めて京師を修め、畿内國の司・郡司・関塞・斥候・防人・驛馬・傳馬を置き、鈴契を造り、山河を定めよ」とあり、さらに「凡そ兵は、人の身ごとに刀・甲・弓・矢・幡・鼓を諭せ」と記す。また同月に「郡國に詔して兵庫を修営らしむ」と記している。

斉明朝における軍事的緊張状態

斉明2年条「多身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。復、嶺の上の両つの槻の樹の邊に、觀を起つ。號けて両槻宮とす。亦是天宮と曰ふ。時に興事を好む。迺ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の

東の山に石を累ねて垣とす。時の人の誇りて曰はく、『狂心の渠。功夫を損し費すこと、三萬餘。垣造る功夫を費し損すこと、七萬餘。宮材爛れ、山椒埋れたり』といふ。又、誇りて曰はく、『石の山丘を作る。作る隨に自づからに破れなむ』といふ」とあり、多武峰に垣を巡らした宮が建造されている。その性格については諸説があるが、両槻宮、あるいは宮の東山の石垣については古代山城としての軍事施設の可能性が想定されている。斉明4年(674)是歳条「國家、兵士甲卒を以て、西北の畔に陣ぬ。城柵を繕修ひ、山川を断ち塞く兆なりといふ。」とあり、筑紫の水城、あるいは山城の造営を伺わせるものである。先の多武峰の宮殿との関わりも注目される。斉明4年4月には「阿部臣、船師一百八十艘を率て、蝦夷を伐つ」とあり、さらに斉明6年3月には「阿倍臣を遣して、船師二百艘を率て、肅慎國を伐たしむ」と記す。この時期は、蝦夷へ向けての討伐が行われ、北方へむけての開拓の時期でもあった。そして、これは先の大化元年の記事の延長上に位置づけられる。斉明4年11月の有馬の皇子の変では、「宮造る丁を率ゐて、有馬皇子を市經の家を圍む」とあり、兵士のかわりに人夫を掻き出していたことがわかる。これは当時、まだ兵士制度が完成していなかったことを意味する。そして、斉明7年には我が国の古代史上最大の国際戦争である百濟救援のための白村江へと続く。

天智朝における国防体制

白村江での敗退を経て、我が国は国家存亡にかかわる最大の危機を迎える。当時、敗戦の余韻から我が国に攻めてくる危機感を身を持って感じていたのである。これに対応するように、天智3年(672)是歳条には「対馬嶋・壹岐嶋・筑紫國等に、防と烽とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名づけて水城と曰ふ」とあり、烽の設置と水城の築城を記す。天智4年8月条には「城を長門國に築かしむ。筑紫國に遣して、達率憶禮福留・達率四比福夫を大野及び椽、二城を築かしむ。」。天智6年11月条「倭國の高安城・讃吉國の山田郡の屋嶋城・対馬國の金田城を築く」。天智9年2月条「高安城を修りて、穀と鹽とを積む。又、長門城一つ・筑紫城二つを築く」とあるように、数年の間に山城の築城記事が頻出する。半島に最も近い北部九州から瀬戸内、そして、大和までの経路の要所要所に山城が連なることになる。そしてその最終地点では、天智6年3月己卯条「都を近江に遷す」と記されるように、ついに都を大和から近江の大津宮へ移していた。大津宮遷都の理由については、様々な要因が唱えられているが、国防上の理由が最も大きな理由であろう。

天武朝における軍事組織

まず壬申の乱の一連の記事の中からみていくことにする。天武元年6月己丑条の記事によって、飛鳥寺西の槻の広場に近江軍が駐屯していたことがわかり、小墾田の兵庫には武器が多く収納されていたことがわかる。このことは飛鳥寺西の広場が饗宴の場以外にも使用されることを物語っており、飛鳥宮の前面に陣を張ることにもなる。さらに天武元年7月壬辰条には「古京は是れ本の營の處なり、固く守るべし」と記されており、飛鳥を死守することが明記されている。翌癸巳条には「八口に至りて、忬りて京を視る」とあり、香具山から飛鳥の防備を偵察したことがわかる。つまりこの段階において香具山の南が都として守られていた地域、すなわち飛鳥の中心部であったことを裏付けている。

壬申の乱に勝利した天武天皇は飛鳥に凱旋し、次々と軍事に関する詔が発せられる。天武紀4年10月庚寅条には「諸王より以下、初位より以上、人毎に兵を備へよ」とあり、これによって都城の武装化がはじまる。さらに天武5年9月には「王卿を京及び畿内に遣して、人別の兵を校へしむ」とある。この記事から都城ならびに畿内での武力装備を行ったことがわかる。ま

た、天武8年2月乙卯条には「親王・諸臣及び百寮の人どもの兵及び馬を検校へむ」、天武10年10月に「鞍馬を検校ふ」とある。そして、天武13年4月丙戌条には、有名な「凡そ政要は軍事なり」ではじまる詔が発せられ、そこでは「文武官の諸人も、務めて兵を用ゐ、馬に乗ることを習へ。則ち馬・兵、併て當身の装束の物、務めて具に儲へ足せ。其れ馬有らむ者をば騎士とせよ。馬無からむ者をば歩卒とせよ」と記され、すべての人が兵器を用い、馬に乗ることを習わしている。また、天武14年9月甲寅条には「京及び畿内に遣して、各人夫の兵を校へしめたまふ」とあり、畿内をはじめ都城の武装強化、そして軍事組織を推し進めている。

一方、天武8年11月是月条に興味深い記事がある。「初めて関を龍田山・大坂山に置く。仍りて難波に羅城を築く」と記し、龍田山・大坂山は摂津と大和の国境であることから、この記事は国境の画定と理解されており、同時に難波の羅城建設は京域の設定を意味すると理解されてきた。ここで注目するのは羅城という我が国の都城にはない施設をあえて「羅城を築く」と記していることから、この頃に羅城あるいはそれに変わる施設が難波京に作られようとしたのかもしれない¹⁾(館野1994・沢村1998)。

持統朝における軍事体制

藤原京になると、持統3年7月丙寅条「左右京職及び諸國司に詔して、射習ふ所を築かしむ」とあり、同8月庚申条には「諸國司に詔して曰はく、『今冬に、戸籍造るべし九月を限りて、浮浪を糺し捉むべし。其の兵士は、一國毎に、四つに分ちて其の一つを點めて、武事を習はしめよ』とのたまふ」とある。戸籍の作成と共に徴兵を定める、この頃に軍団も設置されたようである。持統7年10月戊午条「今年より、親王より始めて、下進位に至るまでに、儲くる所の兵を觀さむ。淨冠より直冠に至るまでは、人ごとに甲一領・大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚・鞍馬。勤冠より進冠に至るまでには、人ごとに大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚。如此預め備へよとのたまふ」。同十二月丙子条「陣法博士等を遣して、諸國に教え習はしむ」。このような度重なる記事は都城の軍事管理体制を証明しており、当時の都の人口と衛府にかかわる人々との比率を考えると、極めて高いものであったことが伺える(館野1994)。

飛鳥地域の国防時期

このように飛鳥時代を通して、国内・国際的に大小の軍事的緊張の時期があり、それにともなった組織作りが随所にみられる。そこで日本書紀の記事から読みとることができる飛鳥時代の軍事組織の形成と、軍事施設の動向、そして、我が国における国防時期の動向についてみていくことにする。

まず軍事組織については、孝徳朝における記事が注目される。これら一連の記事は改新の詔という史料的には検討の余地のあるものも含まれるが、武器の管理徹底が実施されている。これらは諸國に及んでおり、特に蝦夷の近い國に重点がおかれていた。これは乙巳の変によって蘇我氏が滅び、天皇集権化の第一歩が踏み出されたことが考えられ、同時に北方世界へと国土を広げようとしていることに起因すると思われる。しかし、組織としては未だ整備されておらず、有馬皇子の変にあたって兵士ではなく、宮の造営人夫を当てていることから伺われる。これが天武・持統朝になると兵器管理だけでなく、軍事組織の整備に重点が移る。壬申の乱を経た天武朝にとっては、軍事組織の整備・掌握が必要であったのであろう。

次に軍事施設についてみてみよう。少なくとも斉明朝までは飛鳥の都を守るべき施設は記録には現れない。皇極朝の蘇我蝦夷・入鹿の邸宅が柵や濠によって囲まれ、兵士の厳重な警備がなされていたことはわかるが、同様のことは飛鳥宮にも予測される。しかし、都そのものを守

る施設はみられず²⁾、乙巳の変で中大兄皇子が飛鳥寺をまず占拠し城としたとの記述からも伺えよう。しかし、天智朝になると、北部九州から瀬戸内にかけて山城が次々に築城され、斉明朝の両槻宮についても山城の可能性が指摘されている。これらは白村江の敗戦における極度の国際緊張におけるものである。

これらの組織・施設の形成には、国内・国際関係における防衛が関係している。飛鳥時代前半には新羅討征の計画を練るものの、この時期、海を隔てた我が国において防衛という観点での軍事的緊張はみられない。続く皇極朝には兵器の収蔵などがみられる。これは蘇我氏の滅亡によって、朝廷の権力の維持が背景にあったと考えられる。そして、斉明・天智朝になると、にわか緊張が走る。百濟救援と敗北、そして敗戦処理である。おそらく我が国の古代史において最も対外的軍事緊張のあった時代であろう。次の天武朝には敗戦の影響は薄らぐが、壬申の乱を勝ち抜いた時代であり、国内の治安維持も政治にとって重要な事項となる。次々にだされた詔はこれを物語っており、さらに律令国家としての規律の成熟にあらわれていく。

このように、飛鳥時代において国防システムを必要とされる時期は、特に、白村江の戦い直後と、その後の壬申の乱後の天武朝であったことがわかる。我が国の防衛システムは対外からの侵攻ならびに、地方での内乱に備えたシステムであり、軍事施設と軍事組織の整備が大きな課題であり、律令規定はまさにこの点を端的に現わしている。

IV. 飛鳥周辺の丘陵上遺構

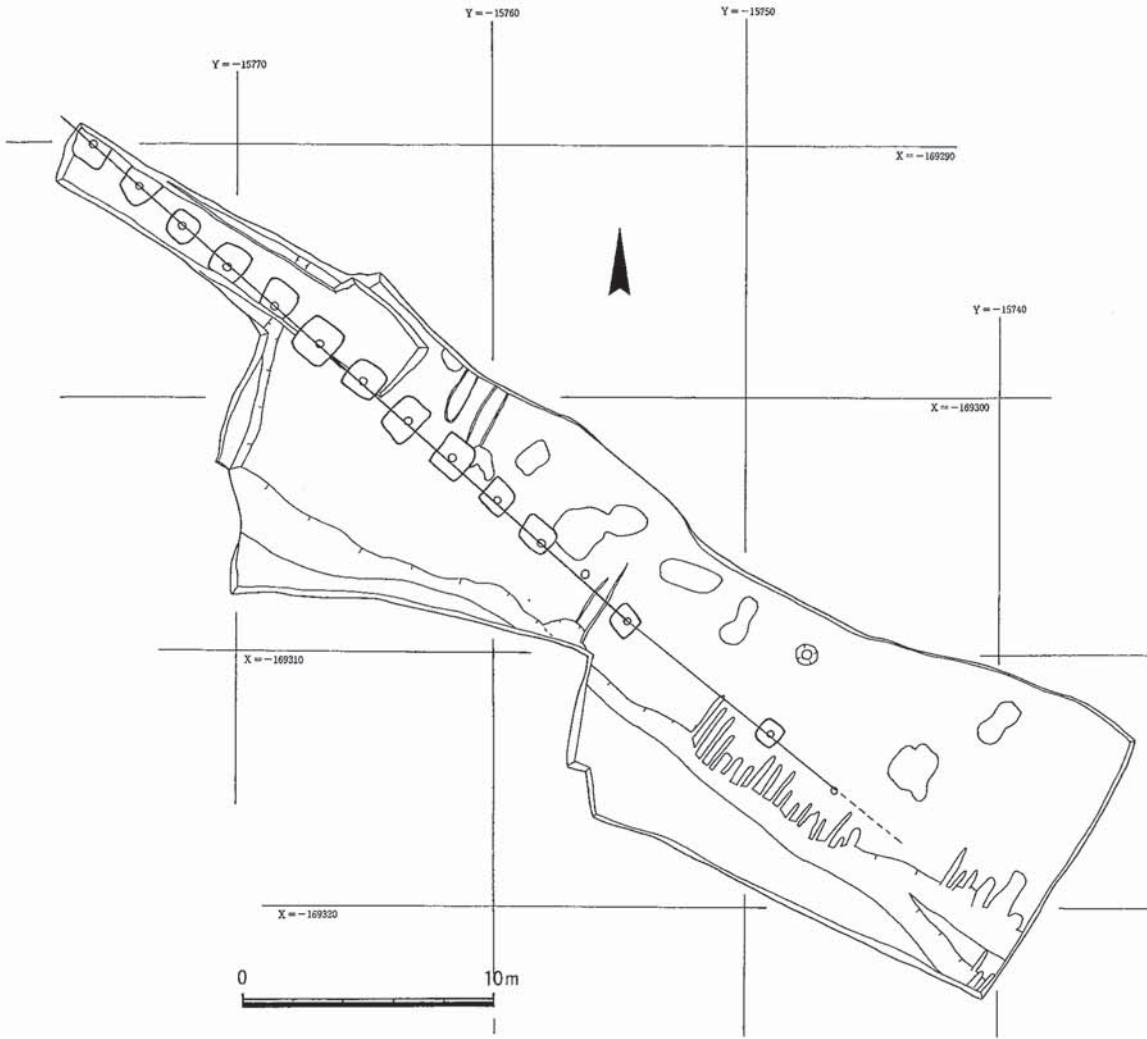
近年、飛鳥及びその周辺の丘陵上において、掘立柱建物の検出や遺物の出土が知られるようになってきた。この中には、後に記すように稜線上の掘立柱塀や土塁、さらには砦状の遺跡も含まれており、一般の邸宅・集落や古墳との関係だけでは理解できず、軍事的色彩の強い遺跡と推定される。ここではこれらの軍事色の強い遺跡について概観しておこう³⁾。

酒船石遺跡向イ山地区

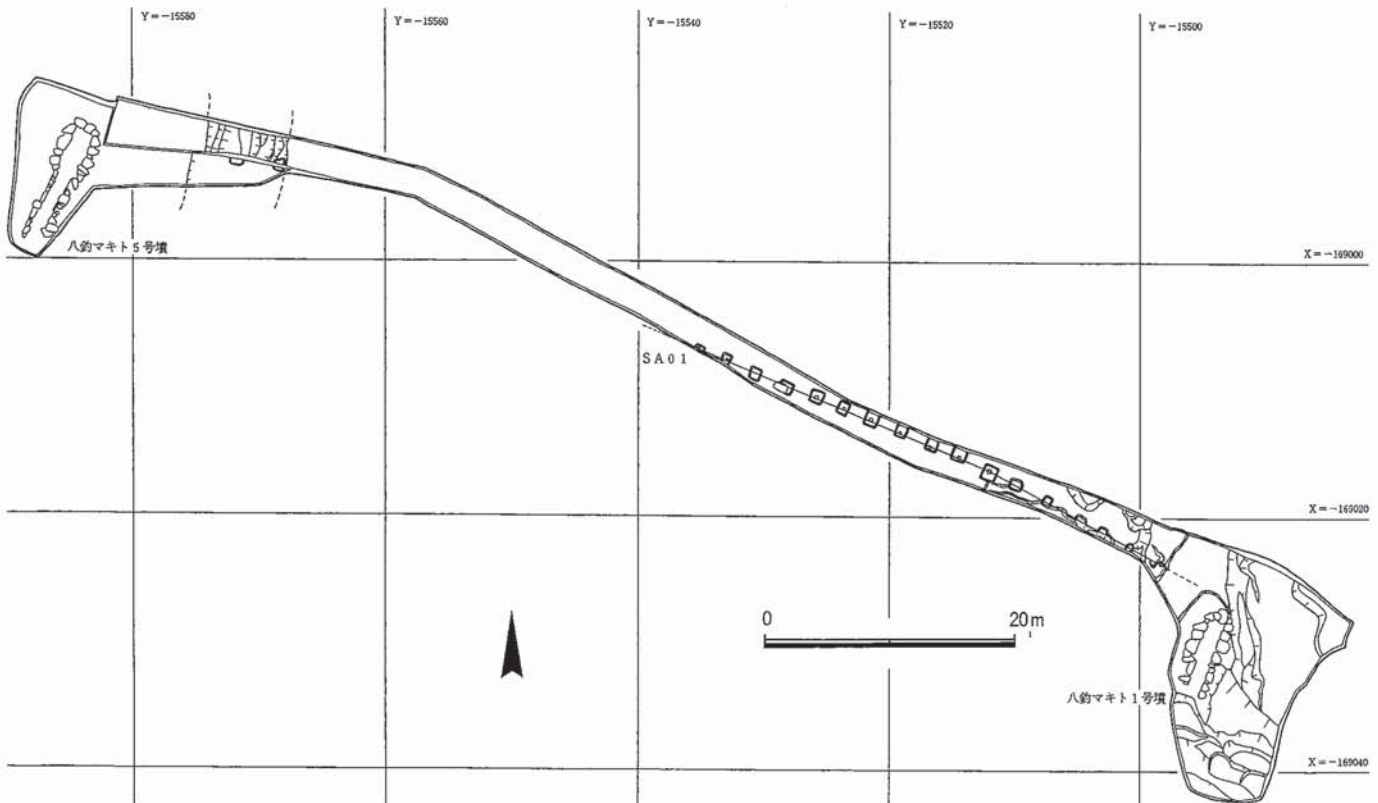
酒船石遺跡の北東にある標高139.7mの丘陵上に位置する掘立柱塀である。便宜上、酒船石遺跡の確認調査として実施しているので、酒船石遺跡向イ山地区と呼称しておく。掘立柱塀は尾根の稜線上に並んでおり、計15基を確認している。塀は尾根の方位に合わせて途中で「く」字形に屈曲している。柱穴は南東にいくほど残りが悪く、掘形の深さが浅くなることから、本来はさらに続いていたものと考えられる。一方、北西にも検出状況からみて、尾根の下方へ本来は続いていたものと推定される。柱間寸法は8尺等間で、柱掘形は一辺1~1.7mまであり、柱径は30cmと復原できる。柱穴からは土師器・須恵器の細片が出土しているが、時期は特定できない(明日香村2000a)。

八釣マキト遺跡

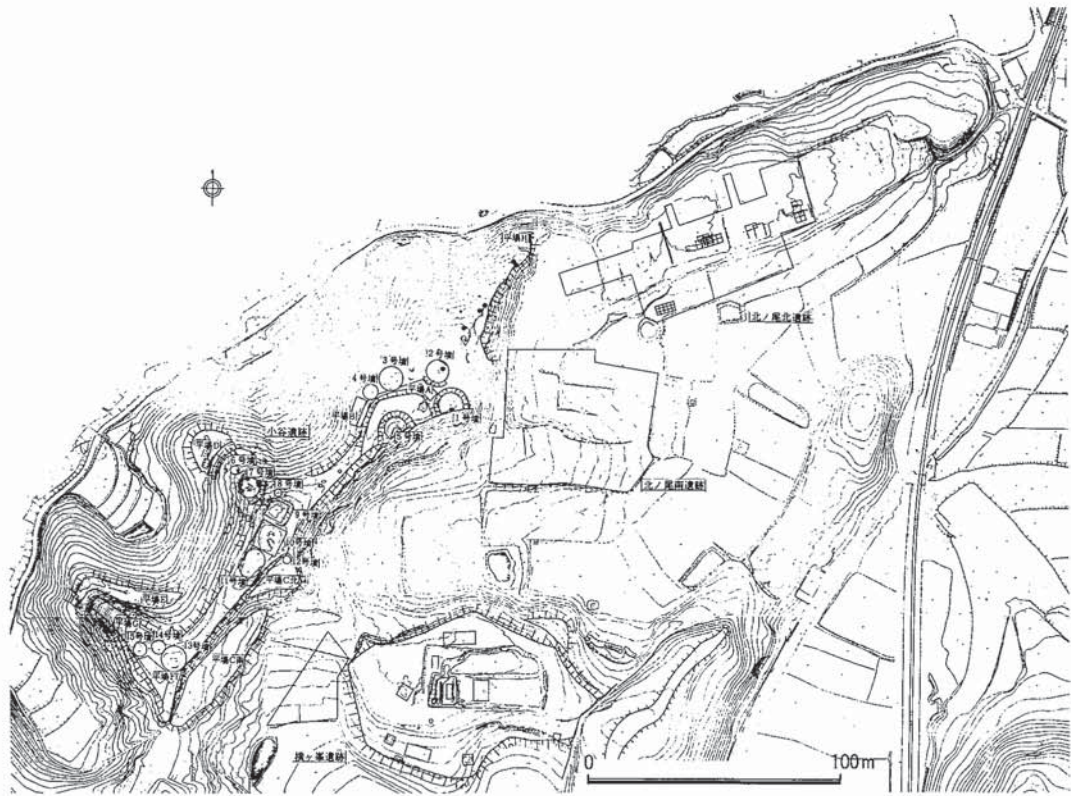
多武峰から北西へと延びる標高147mの八釣地区の尾根上に位置する遺跡である。この調査では6世紀中頃~7世紀前半の古墳と共に、掘立柱塀が一条確認された。掘立柱塀は尾根の稜線上に16基の柱穴が並んでおり、途中で地形にあわせて「く」字形に屈曲する。南東側は柱掘形の深さが浅くなることから、本来はマキト1号墳の墳丘上を超えていた可能性が高く、さらに続いていたものと考えられる。一方、北西側はマキト5号墳の周溝埋土上で2基の柱穴が確認されており、さらに続いていた可能性が高い。柱間寸法は8尺等間、柱掘形は一辺1.1mで、柱径は24cm程に復原できる。掘立柱塀の時期は特定できないものの、八釣マキト1・5号墳よりも新しく、さらに八釣マキト4号墳よりも新しいと考えられること、周辺から7世紀代の土



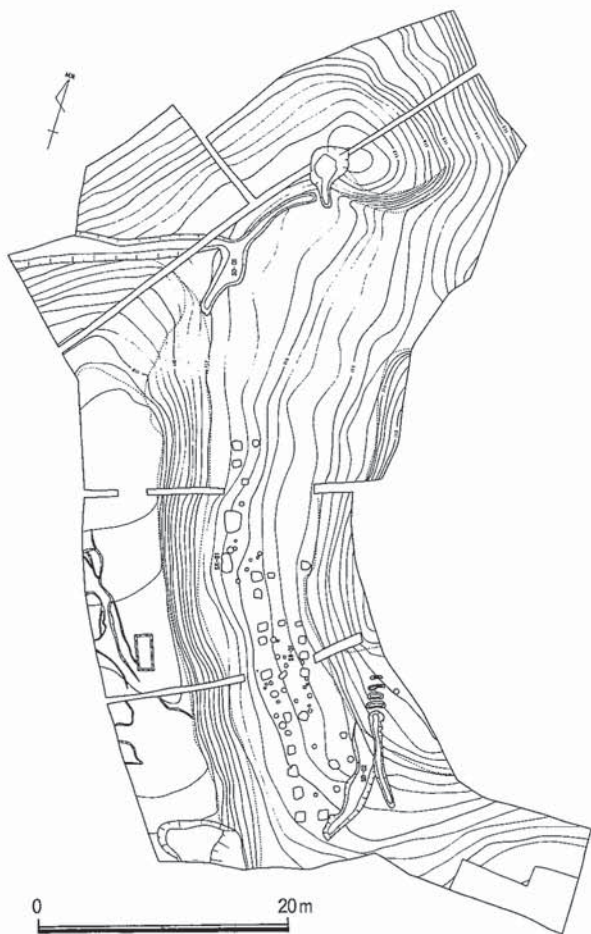
第1図 酒船石遺跡向イ山地区 (1 : 300)



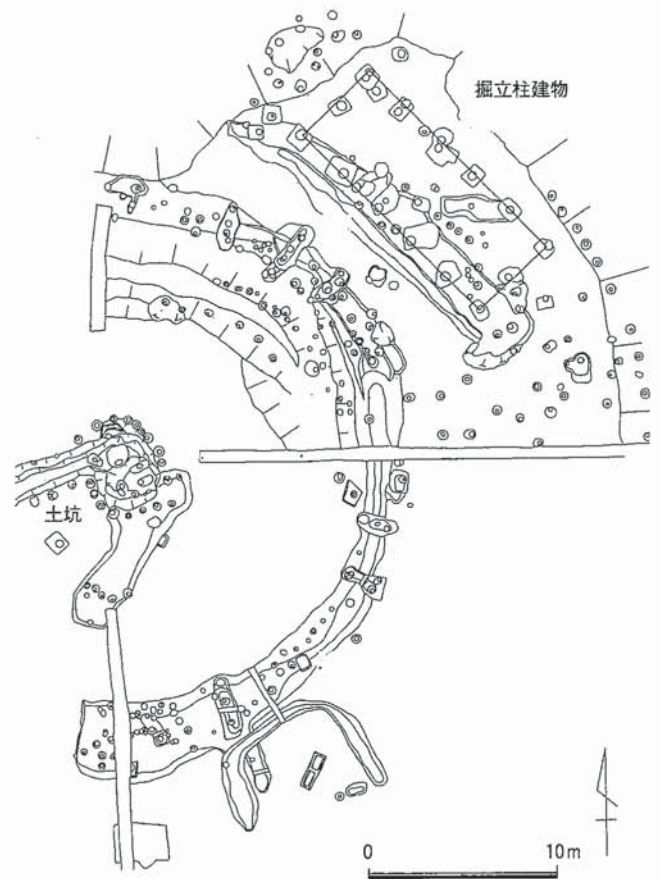
第2図 八釣マキト遺跡 (1 : 600)



第3図 佐田遺跡群 (1 : 3000)



第4図 桧前上山遺跡 (1 : 600)



第5図 森カシ谷遺跡 (1 : 400)

器が出土していることからみて、7世紀中頃～後半に含まれる可能性が高い(明日香村2001a)。

佐田遺跡群

佐田遺跡群は紀路に西接する標高133.2mの丘陵上の遺跡である。この遺跡群はさらに小谷地区・北ノ尾地区・横ヶ峯地区が集まって遺跡群を構成するもので、古墳時代から近世に至る複合遺跡である。この中には6世紀後半から7世紀中頃にかけての古墳が複数存在するが、これに後続する7世紀中頃から後半の掘立柱建物・竪穴住居・塀が検出されている。建物は丘陵上を平らに造成して、建てられており、特に横ヶ峯地区では5×2間の建物を始め、多くの建物がある。掘立柱塀は削平のために、断続的にしか検出されていないが、丘陵造成面の縁で検出されており、塀によって囲まれた中に建物群が建てられていたものと考えられる。同様の塀は小谷地区・北ノ尾北地区でも見つかっており、同じ性格が考えられる。さらに横ヶ峯地区の東に位置する南西から北東にのびる尾根上には、土塁状の地形もみられる。これらの遺跡から出土した遺物には瓦・磚・硯などがあり、一般の集落とは考えがたい。特に、遺跡の立地や位置から飛鳥の外域的施設が想定されている(檀考研1984)。

桧前上山遺跡

紀路に面した東側にある標高120mの丘陵上に位置する遺跡である。これまで2回の調査が行われており、南北の尾根頂部を土塁状にし、その東側をテラス状に削りだして、さらにその土で平坦面を整地していることが判明した。土塁状遺構は幅約6m、高さ3mで上部は平坦になっている。この土塁の東側平坦面に掘立柱建物・掘立柱塀・土坑がある。掘立柱建物は少なくとも3棟検出されており、3×2間、4×2間、さらに3×3間の総柱建物がある。柱掘形は大きいもので1mを越すものがある。また、他にも組み合わせない柱穴が多数あり、さらに多くの建物が建っていたと推定できる。土坑は建物のすぐ横にあり、直径3m、深さ2.5mの大形のものである。出土遺物は南の谷から7世紀前半～藤原宮期の大量の土器等が出土しており、丘陵上から投棄したものと考えられる。その器種組成や他に軒瓦が出土すること、さらに遺跡が紀路に面する立地であることから、官衙的な性格が推定される。また、その年代は建物の掘形から7世紀前半の土器が出土することや、先の谷の遺物から7世紀後半から藤原京期にその年代の一点を押さえることができる(檀考研1983・1985)。

森カシ谷遺跡

紀路に面した丘陵頂部(標高127.0m)に位置する遺跡である。丘陵の斜面をテラス状にカットし掘立柱建物1棟と柵列がめぐる。柵列はカット面の肩部に1～2m間隔で丘陵をめぐるように建てられている。さらに斜面下方にも2列めぐる。掘立柱建物は丘陵北東側のテラス面に建てられており、5間(8.5尺)×2間(8尺)の規模で、柱掘形は一辺約1m、柱痕跡は20cmである。建物の背面には長円形の掘形に3本ずつ柱を立てた柱穴があり、橋脚あるいは階段と考えられている。また、遺跡の頂部には東西4m、南北3mの隅丸長方形の大形土坑がある。最深部で2.2mの深さを持ち、北西部に幅1mの通路が取り付く。土坑内には4カ所の柱穴があり、土坑上部にも、縁を取り巻くように小規模なピットがある。おそらく屋根がついていた貯蔵施設と推定されている。その後の調査によれば、さらに尾根基にちかい標高の高い位置に、2間四方の掘立柱建物があり、柱間は4.2mもある。この建物を囲むように、周囲には柵が巡っている。また、その奥には大壁住居や竪穴住居、堀割等もみられる。

この遺跡はその立地が紀路に面して、遠く飛鳥を見通せる位置にあることや一連の遺構群の構造から交通の要所を押さえた砦と推定されており、飛鳥を防御する施設と見られている。特

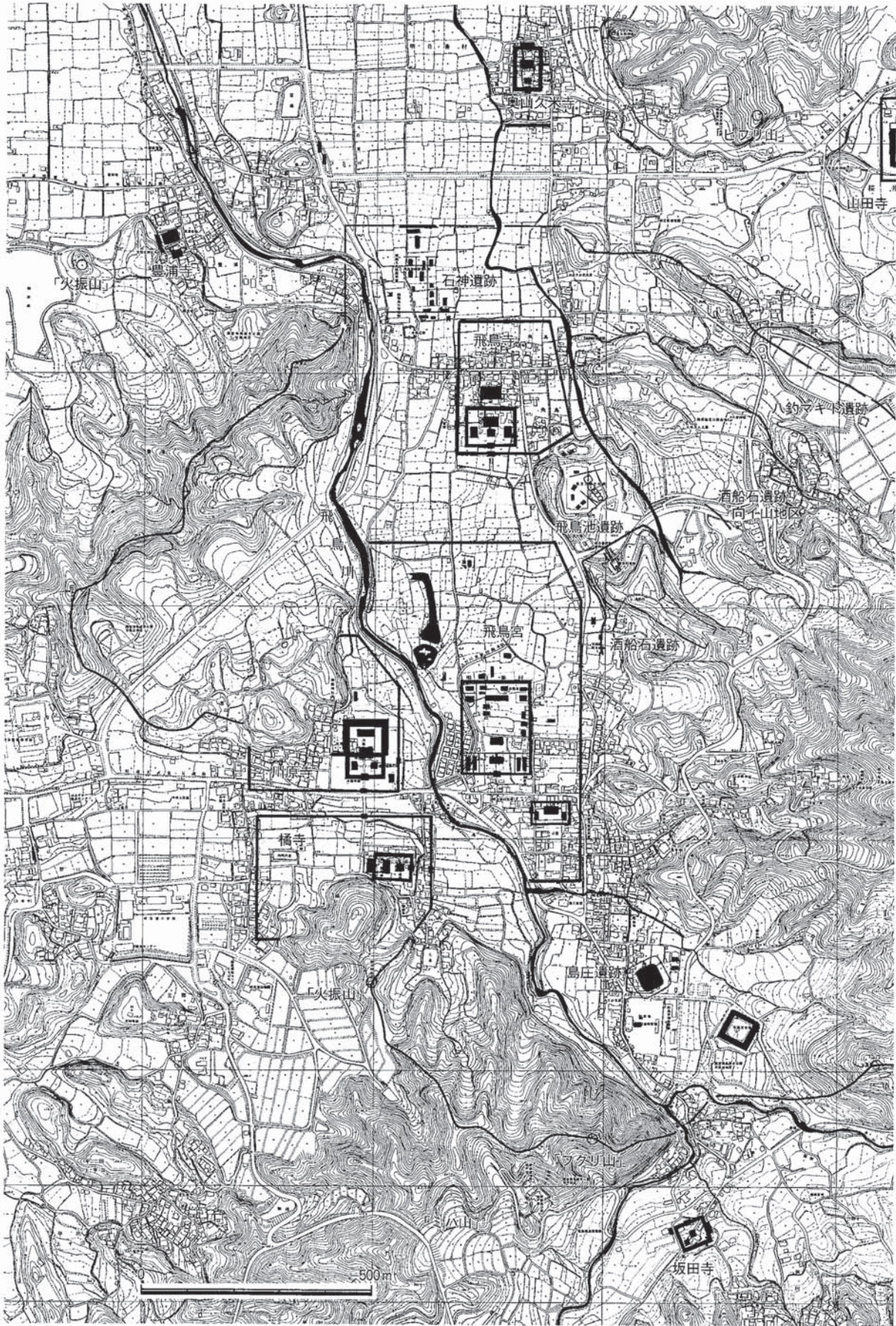
に、大壁住居の存在や遺跡の規模から、渡来人の技術を活用しながら尾根全体を要塞化した遺跡であるという評価もなされている。なお、遺跡の存続時期は飛鳥Vの森カシ谷塚古墳が廃絶後に作られていることから、7世紀中頃～後半と推定され、存続期間が短く、日常生活があったとは思えない（高取町2003）。

V. 丘陵上遺構の評価をめぐって

ここでは先にあげた遺跡の性格について検討していくことにする。まず、酒船石遺跡・八釣マキト遺跡についてみてみたい。

酒船石遺跡向イ山地区と八釣マキト遺跡の掘立柱塀には共通点が多い。すでにみたように両者は尾根の稜線に沿って建てられており、その尾根筋の方向によって「く」字形に曲がる。柱穴の規模や柱間寸法も同規模であり、尾根上の施設を囲む塀ではない。尾根そのものを基壇として掘立柱塀を建てており、あたかも巨大な屏風のごとくそびえたっていた。しかし、両者は共に南東から北西へと伸びる尾根上に位置しており、大局的には平行した位置関係にある。仮に両者が一連の遺構であるとするならば、その囲まれた範囲の中は350m四方にも及ぶことになる。これは飛鳥宮にも匹敵する規模で、現段階においてこの中にそのような施設は想定し難い。よって、両者は直接に繋がるものではなく、併存した関係にあると考えられる。ではこのような掘立柱塀はどのような性格をもっているのであろうか。両者は共に、阿部山田道から見通せる位置にある。つまり、北東から飛鳥へ入ってきた時に、その入口付近の尾根上に幾重にも重なって塀が見える景観が復原できる。まるで飛鳥を守る羅城のように見えるのである。現段階では入口付近にのみ、威圧・威厳を与えるために設けられた施設とみるのが妥当ではあるが、さらにこれらの遺構を積極的に評価をすれば、飛鳥を巡る羅城的施設であった可能性も考えられる⁴⁾。ここではその構造を復元的に想定してみよう。

八釣マキト遺跡の掘立柱塀はその延長部が確認されてはいないが、尾根の稜線に沿って設けられている。よって、尾根の稜線上に続いていた可能性が高い。この尾根筋はさらに北西へと伸びており、八釣集落の北、さらに中世飛鳥城の丘陵へと続く。ここで丘陵部は終わり、平地部となるが、ここで注目されるのは石神遺跡の北端で確認されている東西塀である。石神遺跡では南の東西塀から北へ約180mの位置で、7世紀中頃から後半にかけての東西塀が確認されており、石神遺跡の北限と推定されている（奈文研2001）。この塀を東へ延長した位置に、先の飛鳥城の丘陵がある。よって、石神遺跡北端の東西塀は八釣マキト遺跡の掘立柱塀と接続していた可能性が考えられる⁵⁾。さらにこの塀は南へと曲がり飛鳥川を越えると、そこには甘樫丘の丘陵が北東から南西に横たわっている。この丘陵はこれまでも指摘があるように、飛鳥の北西を守る自然の要害となっており、掘立柱塀が尾根上に設置されていた可能性も考えられる。そして、甘樫丘の南端から川原寺裏山へと続くと、そこには川原寺と橋寺が向かい合って隣接している。先の掘立柱塀が両寺院の大垣に接続することによって、西の玄関を守ることができる。さらに橋寺の裏山から祝戸のフグリ山を稜線上に伝い、飛鳥川まで下る。フグリ山には謎の巨石群がみられる。飛鳥川を越えると、上居の山へと続き、これによって東の山間部を除き、尾根上に掘立柱塀が巡ることになる。では、東側の山間部には掘立柱塀は想定出来ないであろうか。八釣マキト遺跡の掘立柱塀の南東へはやはり、尾根の稜線を登っていくと途中から明日香村と桜井市の市町村境となり、現在も山道が残っている。したがって、これに沿って伸びていた可能性が考えられ、地形的にみれば、万葉展望台のあたりがひとつの頂点になる。



第6図 飛鳥地域の防御施設想定復元図 (1:12000)

そこからは南西に稜線を下ってくると、先の上居の尾根になる。このような想定が可能であるならば、尾根の稜線を利用した掘立柱塀で、飛鳥の中心部を囲む「羅城」的施設が復元可能であろう。

一方、酒船石遺跡向イ山地区の掘立柱塀はその延長を復元しにくく、飛鳥池東方遺跡の塀との関係も考えられるが、柱穴規模などから明確ではない。飛鳥を囲む塀が複数に巡っていたのであろうか。

では、飛鳥南西の紀路を挟んで面した佐田遺跡群と桧前上山遺跡はどのような位置付けがなされるであろうか。両者は紀路に面して、東西に向かい合っているが、紀路からは土塁状遺構しかみえない景観である。この土塁状遺構の裏側には建物群等が見つかっており、土塁の背後に施設を設けていたことがわかる。これらの建物群は、出土する土器群が宮都で出土する土器と変わらないことや、硯・瓦が出土することから一般の集落ではなく、官衙的施設と推定されている。遺跡の位置が紀路と吉野路との合流点にちかく、道路に対しては土塁状の施設を向けていることからすれば、官道に対しての防御する性格が考えられ、飛鳥地域への入口という立地を考えれば、前線基地的な性格を想定できよう。現状では先に復元した羅城のように延々と続く施設とは考えていない。

次に森カシ谷遺跡であるが、この遺跡の性格についてはすでに飛鳥の防御施設としての性格が考えられており、砦・監視施設と考えられている。しかし、河上邦彦氏がすでに指摘しているように（河上2004）、筆者もこの遺跡は「烽」施設であると推定している。遺跡は紀路に接した丘陵先端に位置し、その頂部に大土坑がある。その中腹の飛鳥側に掘立柱建物がある。この遺跡の立地から交通の要所にある施設であることは間違いなく、特に、それを見下ろす位置にあることから、交通路を監視することにひとつの理由があることは明確であろう。ただし、遺跡の中心にある頂部の大土坑は、中心に数本の掘立柱が建てられていることと、土坑の縁にもピットが並ぶことから、土坑には屋根があったと考えられる。土坑には入口の通路があることから、ここではやはり薪等の施設を保管する施設と理解できよう。この上に狼煙台が作られたのであろう。掘立柱建物は飛鳥側にあることは南西から見えない位置にあり、先の佐田遺跡群や桧前上山遺跡と共通する。また、橋脚状遺構と呼称されている遺構は建物側だけでなく、各方面に設置されていることから、監視用の床状張り出しと考えられよう。さらにその下方の中腹には逆茂木状の柵が並んでいる。さらにその後の調査で検出された2間四方の建物や大壁住居等の評価については、2間四方の掘立柱建物は柱間が4.2mのほぼ正方形の建物であり、周囲を柵に囲まれている。このことからこの建物は楼阁状の建物と考えられ、望楼的施設と推定できよう。また、大壁住居や竪穴住居については兵士等の常駐する建物とできようか。

いずれにしても烽施設には狼煙台だけでなく、監視施設や兵士の常駐する施設も必要であり、森カシ谷遺跡はこれらの施設を確認できる点で極めて重要な遺跡である。

では、烽であるならば、どのように情報を伝達していたのであろうか。大和国において烽は、高安烽が記録に記されている。おそらく高安城内に設置されていた烽であろう。高安烽から飛鳥までは約20kmの距離がある。これは律令の規定にもあう距離であり、平城京遷都に伴って、高安烽が廃され、変わって生駒烽と春日烽が設置された。情報伝達経路の変更にかかわるものである。よって飛鳥時代には高安烽が飛鳥への最終伝達烽と理解できる。しかし、森カシ谷遺跡の発見によって、烽遺構が飛鳥周辺に存在することが判明した。そして、それは高安烽からの伝達路だけではなく、その立地や位置から、紀路方面からの烽と考えられる。そこで注目さ

れるのが、岸俊男氏がすでに注目していた「ヒブリ山」地名である。岸氏は大和国における「ヒブリ山（火振山）」地名を検索する中で、飛鳥周辺に11例、飛鳥西方から葛城山麓にかけて5例存在することを指摘した⁶⁾。特にその分布は、飛鳥を取り囲むように集中し、かつ飛鳥に通ずる要路を看守するよう見えると指摘した。氏はこれらの地名の性格を慎重に断定はしなかったものの、倭京の防御施設としての烽や戌の可能性を示唆している（岸1970）。

そこで改めてこれらの地名について検討をしておきたい。まず、明日香村奥山にある「ヒブリ山」(A)は飛鳥資料館のすぐ東にある尾根上で、標高133.4mに位置する。北から南へ延びる尾根の先端で、山田道を見下ろす位置にある。これに対応するように桜井市山田にある「火振山」(B)は山田寺の東方で、東から西へと延びる尾根上にある。標高162.1mである。ここからは山田道を阿部あたりから雷までを見渡せるポイントである。同様に山田道を見下ろす位置にあるのは明日香村豊浦の和田池の東と西にある「火振山」(C)・「ヒフリ山」(D)である。前者は東南から北西へ延びる尾根の先端（標高108.2m）で、後者は南から北へと延びる尾根の先端（標高108.4m）にある。これらは山田道に面したと同時に、飛鳥の北東・北西を抑える位置にある。これと類似の位置にあるのは橿原市菖蒲町の「張山」地名(L)である。ここは菖蒲池古墳の南側にあたり、北から南へと延びる尾根の先端（標高120.0m）にあたる。これはヒブリ山地名ではないが、立地や地名から張り出し状の地形と考えられ、ヒブリ山地名と共通する要素がある。このすぐ南には下ツ道から川原寺と橋寺の間を通過して飛鳥宮まで至る幅12mの東西道路が推定されている。「張山」はこれを見下ろす位置にある。また、明日香村の

	所在地	名称	標高	対面道路	備考
A	明日香村奥山	「ヒフリ山」	標高133.4m	山田道	飛鳥資料館東方の山
B	桜井市山田	「火振山」	標高162.1m	山田道	山田寺東方の山
C	明日香村豊浦	「火振山」	標高108.2m	山田道	和田池の東の小丘
D	橿原市和田町	「ヒフリ山」	標高108.4m	山田道	和田池の西の小丘
E	明日香村祝戸	「フグリ山」	標高197.0m	芋峠吉野路	稲淵宮殿跡北方の山
F	明日香村橋	「火振山」	標高158.0m		橋寺南の八幡神社の山
G	高取町薩摩	「火振山」	標高156.4m	紀路	岡宮天皇陵南方の山
H	明日香村平田	「ヒフリヤマ」	標高121.1m		中尾山古墳東南
I	明日香村栗原	「ヒフリヤマ」			栗原寺北方
J	明日香村阿部山	「ヒフリヤマ」			阿部山東南
K	桜井市戒外	「火振り山」			香久山興善寺背後の山
L	橿原市菖蒲町	「張山」	標高120.0m	川原橋古道	菖蒲池古墳南の小丘
M	橿原市観音寺町	「火振塚」			
※	高取町森	森カシ谷遺跡	標高127.0m	紀路	束明神古墳東南の小丘
N	御所市原谷	「火振塚」			国見山北斜面
O	御所市戸毛	「向火振山」		紀路	国見山南側
P	葛城市南藤井	「火振山古墳」			
Q	葛城市平岡	「火振り山」			
※	平群郡高安	高安城			

表1 奈良県内における「ヒブリ山」関係地名一覧表

祝戸には「フグリ山」(E)の地名があり、その頂部には巨石があり、何らかの遺構の存在が推定される(標高197.0m)。ここからは飛鳥の小盆地を見渡せると共に、妹峠から続く稲淵・阪田の地(芋峠吉野路)を見下ろすことができる。さらに橘寺南方の「火振山」(F)からは飛鳥の中心部を見渡すことのできる(標高158.0m)。

一方、森カシ谷遺跡周辺を見てみると、当遺跡の西南の高取町薩摩に「火振山」(G)があり、いずれも紀路を見下ろす位置にある。さらに紀路を南下すると御所市戸毛に、正確な位置を特定できていないが、「向火振山」(O)が紀路に面する位置にある。さらに下った吉野川沿では、五條市に「火打」という地名があり、興味深い。このように紀路に沿った地域には「ヒブリ山」地名が並ぶことは、官道に沿って伝達路があったことを想定される。

これらの他では明日香村平田の中尾山古墳東方に「ヒフリヤマ」(H)、明日香村栗原の栗原寺北方の「ヒフリヤマ」(I)、明日香村阿部山の東南の「ヒフリヤマ」(J)、桜井市香久山の東南方にある「火振り山」(K)があるが、いずれも道路沿いではなく、山間部に位置しているが、紀路方面、高安方面からの伝達路とも理解できる。また、葛城市南藤井に「火振山古墳」、葛城市平岡に「火振り山」の地名が残り、葛城山麓にもこの地名が展開することが予想される。

これらの「ヒブリ山」地名を烽施設として考えると、これまで推定されていた高安烽から飛鳥への直接伝達路の他に、桜井市阿部方面からの伝達路としてA Bが位置づけられ、高安方面からの伝達路としてC D Kが、葛城方面からの伝達路としてM Nが、紀路方面からは森カシ谷遺跡と、G Oが続く⁷⁾。このように「ヒブリ山」地名等は直接交通路を監視すると共に、烽としての伝達施設としての位置づけが考えられる。これと同時にA～Fは飛鳥の入口・要所を監視することができるよう配置されていることがわかる。

VI. 飛鳥を守るその他の施設群

先に見た遺跡の他に、飛鳥地域において、いくつかの施設が飛鳥を守る防御施設となりうるものがある。それは、その施設が本来防御施設として作られたものではなく、緊急時には防御施設に代用できるものである。ここではそのいくつかについて検討してみよう。

濠としての運河と河川

飛鳥地域には大小の河川が流れている。河川は当然、川の左右岸を分けるものであり、川を渡る為には橋が必要となる。つまり、河川は自然の濠であり、防御施設となりうるのである。飛鳥の中心部には東南から北西へと飛鳥川が流れている。これによって飛鳥川の右岸に位置している飛鳥宮や飛鳥寺は、左岸つまり西側とは画されることとなる。これに対して飛鳥の東側についてはこれまであまり注目されてこなかった。飛鳥寺の東側には、現在でも小河川が流れているが、この河川が飛鳥時代まで遡ることが、飛鳥東垣内遺跡で確認された(明日香村2000 b)。そこでは7世紀中頃の幅10mの運河を改修しながらも奈良時代まで存続していることが判明している。この運河はこれまでの調査から酒船石遺跡東側から飛鳥寺の東側、奥山久米寺の西を北上し、香具山の西側まで繋がっていたと推定されている。その後は中の川となり米川に接続していた。これらは溝の規模や位置、砂岩が使用されていることから斉明2年条「迺ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流れ順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人謗りて曰く、狂心渠。」にある狂心渠と推定されている。運河は物資を運ぶ人工の溝であり、具体的には「天理砂岩」を酒船石遺跡まで運ぶために掘削されているが、その後は飛鳥池工房の物品の運搬や農業用水路としても

利用されたのであろう。この発見によって、東側についても運河で画されていたことになる。

防衛施設としての古代寺院

古代寺院が軍事施設に代用できることは乙巳の変の飛鳥寺でも知られている（皇極4年6月戊申条）。そこには中大兄皇子と蘇我氏の対決に際して「法興寺に入りて、城として備ふ」と記す。古代寺院は当然のことながら宗教施設であり、本来は軍事施設ではない。しかし、当時の寺院が大垣によって嚴重に囲まれていたことから、軍事的緊張時には容易に軍事施設に代用できるのである。このことは飛鳥の小盆地の入口に飛鳥寺を建立し、その奥に飛鳥宮（飛鳥岡本宮）を造営したことからも伺える。このような視点で飛鳥地域の寺院配置を見てみると、山田道沿いの北東に山田寺、北西に豊浦寺・和田廢寺、飛鳥宮の西側には東西道路を挟んで川原寺と橘寺が並んでいる。さらに芋峠へ向かう南側には坂田寺が位置する。これらは飛鳥宮の入口である北東・北西・西・南の主要道路沿いに古代寺院を配置したことになり、軍事緊張時には宮城の防衛施設となりうる。飛鳥・白鳳寺院は各地の例をみると、主要交通路の要所に配置されていることが多い（大脇1997）。これは造営氏族の本拠地の立地と重なるので、必ずしも宮城を守るように意図的に配置されたものではない。しかも各寺院の造営時期には時期差があり、防衛のために一定の計画のもとに配置したとは考えがたい。しかし、結果的に飛鳥宮を守護するように配置されており、7世紀後半に各寺院の整備が進むのも事実である。このような宮と寺院の配置関係を示す好例は同時代の近江京でもみられる。大津宮周辺では幹線道から山越え道が枝分かかれする地点、あるいは枝分かれした山越え道沿いに白鳳寺院が立地する。林博通氏は穴太廢寺・崇福寺・



第7図 近江京の宮殿と寺院

1. 穴太廢寺
2. 崇福寺跡
3. 南滋賀廢寺
4. 大津宮（錦織遺跡）
5. 園城寺前身寺院

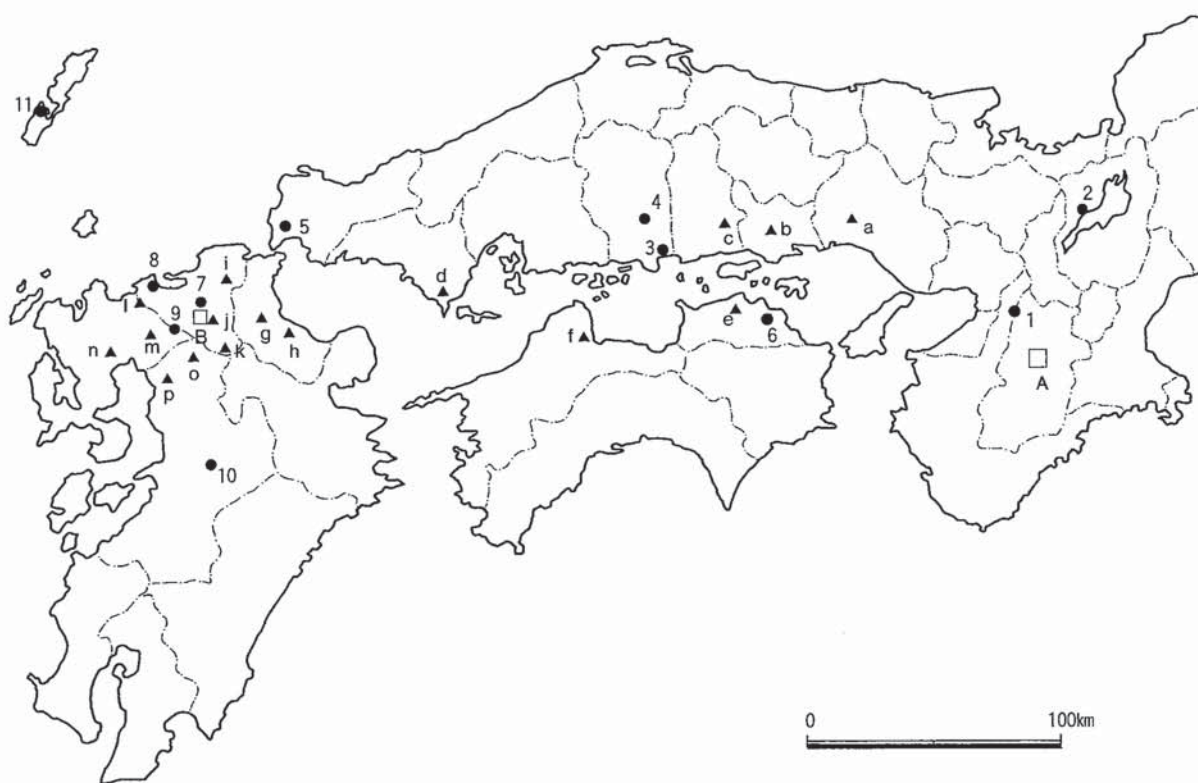
南滋賀廃寺・園城寺前身寺院が大津宮を守護する寺院であるとする（林1984）。また、松浦俊和氏はさらに広範囲に考え、坂本八条遺跡・大津廃寺・石山寺前身寺院も同様の性格とみている（松浦1997）。近江では、いずれの寺院も大津宮遷都段階で造営、あるいは整備されたものが多く、大津宮の造営と密接な関係がみられる。

小墾田兵庫と飛鳥寺西槻の広場

『日本書紀』の壬申紀には飛鳥地域に小墾田兵庫があったことが知られている。小墾田兵庫とは小墾田地域に設けられた武器庫であるが、その位置については確定していない。「小墾田」の古地名については、雷丘東方遺跡で奈良時代の井戸から「小治田宮」と記された墨書土器が出土した（明日香村1988）ことから、「小墾田」は「飛鳥」の北側に広がる地域名称と推定された。その境界は山田道、あるいは飛鳥寺の北辺道路が有力とみる（相原1998）。小墾田兵庫については、石神遺跡で藤原宮期の整地層から大量の鉄鏃・斧・刀子が出土しており、周辺に保管庫等があった可能性が指摘されており（奈文研1985）、小墾田兵庫の有力な候補地となる（相原1999・2003）。この場所は飛鳥の北からの入口付近に位置しており、壬申の乱の時には、すぐ南の飛鳥寺西槻広場に陣営を設けたことから、飛鳥寺西槻広場を含めて、緊急時には軍事施設に利用されることがわかる。

古代山城の模索

飛鳥地域に古代山城が存在したとする説は数人の研究者によって提唱されている。最初に提



第8図 古代山城分布図（1：3000000）

- | | | | | | | | |
|---------|-----------|---------|---------|---------|----------|----------|--------|
| A. 飛鳥 | B. 大宰府 | 1. 高安城 | 2. 三尾城 | 3. 茨城 | 4. 常城 | 5. 長門城 | 6. 屋嶋城 |
| 7. 大野城 | 8. 怡土城 | 9. 基肆城 | 10. 鞠智城 | 11. 金田城 | | | |
| a. 城山城 | b. 大廻小廻山城 | c. 鬼城山城 | d. 石城山城 | e. 城山城 | f. 永納山城 | g. 御所ヶ谷城 | h. 唐原 |
| i. 鹿毛馬城 | j. 宮地岳 | k. 杷木城 | l. 雷山城 | m. 帯隈山城 | n. おつぼ山城 | o. 高良山城 | p. 女山城 |



第9図 飛鳥周辺地域の防御施設 (1 : 50000)

起したのは石母田正氏で、『日本書紀』齊明2年の両槻宮を軍事施設とみた(石母田1971)。その後、門脇禎二・阿部義平氏も同様の可能性を指摘した(門脇1970・阿部1991)。平成4年になって、飛鳥の東方丘陵上の酒船石遺跡が発見され(明日香村1994)、河上邦彦氏は酒船石から多武峰をめぐる巨大な山城を推定している(河上1994)。一方、和田萃氏は齊明紀にある「宮の東の山の石垣」と「両槻宮」を別の施設とし、前者を酒船石遺跡、後者を未発見の山城とみる(和田2003)。同様の見解は、関西大学・亀田博・小澤毅氏も指摘する(関大1995・亀田1998・小澤2002)。酒船石遺跡は平成11年度の調査で亀形石槽を用いた導水施設が検出され(明日香村2001b)、また砂岩石垣の範囲は、ほぼ酒船石のある丘陵で収まることから、筆者は酒船石遺跡を「宮の東の山の石垣」とみている(相原2004)。両槻宮については未発見であり、その位置は筆者にも断案はない。しかし、多武峰の地形をみると、ひとつには、頂部を含む談山神社のある小さな盆地部が山城の立地になう候補となる。もう一つは万葉展望台のある地域で、飛鳥からみると、ここがひとつの頂点となっているように見える。ここであれば、先に復元した「羅城」的施設が両槻宮に取り付け形態をとる。いずれにしても、飛鳥東方に山城が想定できると、大宰府と大野城との関係に類似することになる。

Ⅶ. 総括—飛鳥地域における防衛システム構想の復原—

本稿では、飛鳥周辺の丘陵上で検出されている遺跡について、軍事的要素の強い遺跡である可能性を推定してきた。また、律令の規定や文献史料にみる軍事的緊張感の検討を踏まえて、これらの遺跡が設置された背景についても検討した。その結果、先の丘陵上の遺構については烽や入口を警護する性格をもつ遺跡と推定でき、掘立柱塀は一種の羅城的施設とみなせる。さらに運河・河川や古代寺院、山城、兵庫についても、飛鳥を防御するという視点でみると、いずれも「飛鳥の守り」になりうる重要施設と考えられる。また、飛鳥地域におけるこれら諸施設を有機的にみたととき、飛鳥地域を取り巻く防衛システム構想の一端が見えてきたと考えられる。ここでこれらを総合的に検討して、飛鳥地域の防衛システム構想の復原を試み、これらの施設で飛鳥の何を守っていたのかを考えてみたい。

いうまでもなく、我が国の西国の守りの要は筑紫太宰府であり、東国の守りの要は東北の城柵(後には陸奥多賀城)であった。しかし、すでにみたように、我が国の軍事的緊張は白村江での敗戦後であり、古代史上最大の内乱であった壬申の乱である。よって飛鳥の防衛についても西方への警備は嚴重であった。それは古代山城や烽が北部九州から瀬戸内沿いに配備され、最後の烽は大和国高安城の高安烽であることからわかる。これら山城の配置をみると、北部九州、瀬戸内そして生駒・葛城山系という防衛ラインを読みとることができる(門脇1992)。

飛鳥時代の烽の確実な遺構は、先にみた森カシ谷遺跡以外にはなく、その可能性のあるものに「ヒブリ山」地名がある。その分布は飛鳥の小盆地を取り囲む地域と飛鳥西南から葛城地域に広がる。記録に表れる烽は高安烽が飛鳥に最も近いが、森カシ谷遺跡の発見によって、飛鳥周辺にあることも判明し、同時に高安烽以外の伝達ルートが想定される。それは葛城あるいは紀路から森カシ谷遺跡へのルートである。この伝達ルートの発見によって、高安烽から飛鳥へのルートだけでなく、広く西方からの伝達ルートがカバーされることになった。さらに、烽や監視施設と考えられる「ヒブリ山」地名は飛鳥を取り囲むようにも存在する。特に、飛鳥への北東入口の「山田」、北西入口の「豊浦」、西入口の「小山田」、南入口の「坂田」で監視できることになる。また、古代寺院の配置も「ヒブリ山」地名と共通し、山田寺・豊浦寺・川原寺・

橋寺・坂田寺が配置されている。これらの寺院が主要道路沿いの飛鳥入口にあることによって、軍事緊張時には飛鳥盆地を死守する軍事施設となる。さらに飛鳥川・運河によって飛鳥の西側と東側を画されており、飛鳥中心部は嚴重に隔離されることになる。このように飛鳥中心部はヒブリ山・古代寺院・運河河川によって守られ、そこには兵器庫や陣を張ることのできる槻木広場がある。さらにこれらを囲むように、羅城や山城も想定できるのである。

このようにみると、我が国の国防システムは①北部九州から瀬戸内にかけての山城・軍団の防衛システム、②生駒・葛城山系とそこから飛鳥への烽等の監視システム、③飛鳥中心部の羅城・寺院・運河・監視施設という三重構造となっていた。①はまさに大陸・半島からの侵略を防ぐ、国防システムであり、②は大和国の防衛及び、各国からの監視とその情報システムであり、③が最終的な首都防衛システムと理解できる。つまり、最も嚴重に守られていたのは飛鳥中心部であったことがわかる。

では最終的に最も嚴重に守りたかったのは飛鳥中心部の何だったのであろうか。先に復元した「羅城」的施設では飛鳥・川原・橋・島庄の地域が囲まれていたことになり、この中に存在するのは石神遺跡・飛鳥寺・飛鳥宮・川原寺・橋寺・嶋宮である。このうち寺院はさらに防御施設にもなりうる事が判明しているので、最終的に守りたかったのは飛鳥宮とその周辺ということになる。飛鳥宮の周辺には、関連する官衙群が配置されており、この地域には一般の邸宅は基本的に存在しない（相原2003）。つまり、ここで守りたかったのは、宮殿とその関連施設（官衙群）である。言い換えれば飛鳥の宮城といえようか。

このような宮城の防衛システムは近江大津宮周辺にもみることができる。近江京は三尾城から山並み稜線を伝い勢多橋までのエリアが広い意味で京域とされており、筆者も穴太・南滋賀・錦織地域を中心に近江京を推定したことがあり、宮は錦織地区に中枢部があり、周辺に官衙が分散していると推定した（相原1994）。古代寺院は宮を取り囲むように配置されており、幹線道路からの入口を守っている。まさに飛鳥と同様の構造である。ただし、その地勢からみると飛鳥よりも防衛ラインは硬固である。

では、次の新益京ではどうであろうか。新益京と飛鳥の最も大きな違いは、方画地割の条坊の有無である。新益京ではこれまでに東西の京極が確認されているが、その外側には羅城に相当する築地塀あるいは掘立柱塀は確認されていない（橿原市1997・桜井市1997）。さらに南辺についても羅城はなかった可能性が高い。つまり、新益京においては京域を囲む羅城は存在しないのである⁸⁾。おそらく、烽や監視施設・衛府などでの警護であったのであろう。これに対して、藤原宮は高さ5.5mの掘立柱大垣と幅5.3mの外濠、17.7mの需地によって条坊区画からは一定の空間で隔離されており、後の平城宮よりも、宮と京の関係は隔絶した関係にあるといえる。つまり新益京において、京の守りよりも、宮の守りに重点が置かれていたことがわかる。このことは、飛鳥において京の守りよりも、飛鳥中心部の宮城を守っていることと共通する点であろう⁹⁾。

いずれにせよ、飛鳥宮の宮城（飛鳥地域中心部）は、これらの施設によって守られており¹⁰⁾、当時の防衛システムと捉えることが可能である。天武天皇が「凡そ政の要は軍事なり」と詔で記したのは、このような防衛システムの構想があったからかもしれない。

本稿を成すにあたっては、壺岐一哉・岡村道雄・門脇禎二・木場幸弘・西光慎治・関川尚功・竹内亮・篁園勝男の各氏をはじめ多くの方々よりご教示・ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

（平成16年10月31日稿了）

平成15年12月18日、明日香村教育委員会文化財課埋蔵文化財室長であった納谷守幸氏が亡くなられた。納谷さんとは、筆者が奈良国立文化財研究所に在職していた頃にはじめて出会った。当時は交流も少なかったが、その後、筆者は滋賀県に転任し、さらに縁あって明日香村に奉職することになった。そこで改めて、納谷さんと再会し、その初日の朝には役場の前で出迎えてくれたことを思い出す。その後は共に発掘調査や文化財行政に携わることになったが、あいかわらず寡黙で、先輩として見守ってくれていたことを思い出す。後になって知ったことだが、筆者を明日香村に呼んでくれたのは納谷さんであった。今後は、納谷さんが目指していた明日香村の文化財行政の遺志を継いで、がんばっていくことをここに誓い、小稿をご霊前に捧げたい。合掌……。

註

- 1) 難波京の羅城の有無については、条坊京の存在とともに考古学的にはまだ確定できていない。ただし沢村仁氏は京の南辺と東西辺に、羅城の痕跡ともみれる遺構・地形を指摘している（沢村1998）。
- 2) 門脇禎二氏は甘樫丘と畝傍山東方の蘇我氏の邸宅、鉾削寺等による、飛鳥の防衛体制があったと指摘している（門脇1970）。
- 3) 丘陵上の遺構については、近年多くの調査事例が増えてきており、特に、橿原市五条野丘陵では顕著である。しかし、これまでにみつけている丘陵上遺構の全てが、軍事に関する遺跡ではなく、邸宅・官衙の遺跡も含まれる。これらについては飛鳥周辺の邸宅として、以前に検討したことがある（相原2000）。本稿では確実に軍事に関わるとおもわれる遺跡のみを対象とした。
- 4) 尾根稜線上に掘立柱塼を設置する事例に、橿原市五条野町にある植山古墳の背後の遺構がある。そこでは古墳の背面の尾根上に掘立柱塼が2時期分確認されているが、植山古墳の墓域を明示する構造物と考えられている（橿原市2001）。植山古墳は改葬前の推古天皇と竹田皇子の墓と推定されており、改葬後の陵墓の取り扱い方とも関連して興味深い、いわゆる飛鳥地域の防御施設とは考えていない。
- 5) 今回復元する羅城的施設は、石神遺跡の北限塼や寺院の大垣などの既存の施設に接続することによって構成されていると考えている。
- 6) 岸氏の検索した「ヒブリ山」地名のうち、J KMNOQについては大和地名大辞典（大和地名研究会1952）によっても、町名までしか位置を特定できていない。
- 7) 高安・葛城からの伝達路を考えると、もうひとつ畝傍山の存在が大きい。両者から飛鳥方面を望むと、畝傍山が最も確認しやすく、ランドマーク的存在で、ここに烽施設を想定できる。さらに古事記には「畝火山」という表現もあり、興味深い。
- 8) 阿部義平氏によると、平城京では井上和人氏が指摘した南辺の羅城（井上1998）に加えて、そこから連なる山並みの稜線を使った山水境の城郭都市を推定している（阿部2003）。
- 9) 宮域を囲む施設は、平城宮では築地大垣となるが、藤原宮では掘立柱塼である（黒崎1997）。飛鳥宮の羅城的施設が掘立柱塼であることと共通する。
- 10) これはさらに遡った古墳時代の居館でも同様で、群馬県三ツ寺I遺跡などは柵と濠によって館を守っている。飛鳥宮や藤原宮における宮城の構造と基本的にかわらない。京域には羅城はないことも裏付ける。

参考・引用文献

- 相原嘉之1994 「近江京論の再検討・予察—7世紀における近江南部地域の諸相—」『紀要 第7号』滋賀県文化財保護協会
- 相原嘉之1998 「飛鳥地域における古代道路体系の検討」『郵政考古紀要 第25号（通巻34号）』大阪郵政考古学会
- 相原嘉之1999 「小治田宮の土器—雷丘東方遺跡出土土器の再検討—」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』同刊行会
- 相原嘉之2000 「飛鳥地域における空間利用形態についての一試論—掘立柱建物の統計的分析を通して—」『明日香村文化財調査研究紀要 創刊号』
- 相原嘉之2003 「飛鳥浄御原宮の宮城—飛鳥地域における官衙配置とその構造—」『明日香村文化財調査研究紀要 第3号』
- 相原嘉之2004 「酒船石遺跡の発掘調査成果とその意義」『日本考古学 第18号』日本考古学協会

- 明日香村教育委員会1988 『雷丘東方遺跡 第3次発掘調査概報』
- 明日香村教育委員会1994 「1992-2次 酒船石遺跡(第1次)の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成5年度』
- 明日香村教育委員会2000a 「1998-11次 酒船石遺跡(第11次)の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成10年度』
- 明日香村教育委員会2000b 「1998-24次 飛鳥東垣内遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成10年度』
- 明日香村教育委員会2001a 「1999-3次 八釣・東山古墳群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成11年度』
- 明日香村教育委員会2001b 「1999-12次 酒船石遺跡(第12次)の調査・2000-1次 酒船石遺跡(第13次)の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成11年度』
- 阿部義平1991 「日本列島における都城形成-大宰府羅城の復元を中心に-」『国立歴史民俗博物館研究報告 第36集』
- 阿部義平2003 「藤原京・平城京の構造」『古代王権の空間支配』青木書店
- 石母田正1971 『日本の古代国家』
- 井上和人1998 「平城京羅城門再考-平城京の羅城門・羅城と京南辺条系里-」『条里制古代都市研究 通巻14号』条里制古代都市研究会
- 大脇 潔1997 「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 小澤 毅2002 「飛鳥の都」『日本の時代史3 倭国から日本へ』吉川弘文館
- 橿原市千塚資料館1997 「土橋遺跡」『かしはらの歴史をさぐる5』
- 橿原市教育委員会2001 「植山古墳の調査」『橿原市埋蔵文化財発掘調査概報 平成12年度』
- 門脇禎二1970 『飛鳥 その古代史と風土』日本放送出版協会
- 門脇禎二1992 『吉備の古代史』日本放送出版協会
- 鎌田元一1988 「律令軍制の形成」『日本の古代15 古代国家と日本』中央公論社
- 亀田 博1998 「酒船石遺跡と神籠石」『季刊明日香風 第67号』飛鳥保存財団
- 河上邦彦1994 「両槻宮と酒船石北西の石垣について」『橿原考古学研究所論集 第十二』吉川弘文館
- 河上邦彦2004 「飛鳥の入り口守る烽火台……カシ谷遺跡」『飛鳥発掘物語』産経新聞社
- 関西大学地理学教室1995 「両槻宮と古代山城」『奈良県明日香村の地理』
- 岸 俊男1970 「飛鳥と方格地割」『史林 第53巻第4号』史学研究会
- 黒崎 直1997 「掘立柱塼と築地塼-藤原宮と平城宮の外周施設をめぐる-」『立命館大学考古学論集I』同論集刊行会
- 桜井市文化財協会1997 「上之庄遺跡第4次発掘調査の概要」『平成8年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 佐藤 信1997 「古代国家と烽制」『烽の道-古代国家の通信システム-』青木書店
- 沢村 仁1998 「難波京の羅城と後期難波京の外京、他二三の問題について」『条里制古代都市研究 通巻14号』条里制古代都市研究会
- 関川尚功1993 「飛鳥・藤原京をめぐる遺跡と古墳群」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念 考古学論叢』関西大学
- 高取町教育委員会2003 「高取町森カシ谷遺跡調査概要」『平成14年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 館野和己1994 「古代都市-宮から京へ-」『日本の古代国家と城』新人物往来社
- 千田剛道1997 「古代山城研究と都城制研究」『青丘学術論集 第10集』韓国文化研究振興財団
- 奈良県立橿原考古学研究所1983 「桧前・上山遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1984 「佐田遺跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1983年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1985 「桧前・上山遺跡発掘調査概報II」『奈良県遺跡調査概報1984年度』
- 奈良国立文化財研究所1985 「石神遺跡第4次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』
- 奈良文化財研究所2001 「石神遺跡の調査-第110次-」『奈良文化財研究所紀要2001』
- 早川庄八1988 「東アジア外交と日本律令制の推移」『日本の古代15 古代国家と日本』中央公論社
- 林 博通1984 『大津京』ニューサイエンス社

林 博通2001 『大津京跡の研究』思文閣出版

松浦俊和1997 「近江大津宮新『京城』論—大津宮に「京城」は設定できるか—」『大津市歴史博物館研究紀要 第5号』

森 公章2002 「倭国から日本へ」『日本の時代史3 倭国から日本へ』吉川弘文館

大和地名研究会1952 『大和地名大辞典』

和田 萃2003 『飛鳥—歴史と風土を歩く—』岩波書店

挿図出典

第1図：明日香村2000 aを一部改変

第6図：筆者作成

第2図：明日香村2001 aを転載

第7図：林2001を転載

第3図：檀考研1984を一部改変

第8図：筆者作成

第4図：檀考研1983を一部改変

第9図：筆者作成

第5図：高取町2003を一部改変